'87.11.

児童文学

最首悟

不可能存在を予告する題名

皿海達也『海のメダカ』

"ふつう"になることが皆の"安心"

集団化と戦後教育

ゼミに鍋野晋太郎氏を招いて話を聞いた。「菊と日本刀」(谷沢書房)の著者である。唯一の尉官級の中国戦犯で、ソ連抑留五年の後、中国に移送、禁固十三年の刑を受け、撫順で服役、帰国して「自分のしたこと」を事実的に話そうとする活動を続けている。

話のポイントは第一に、なんといっても、死刑覚悟の判決が「上級の指示」によって禁固となり、傍聴席から号泣がおこったことの意味である。佐・将官級戦犯も一人も死刑にせず、対日賠償を求めずとした決定に、中国民衆の怨嗟・号泣がそのまま凍結している。

第二は、人は人を容易には殺せないこと、いわんや日本刀では。殺すように仕向ける軍隊内抑圧が不可欠であること。そして第三に、いったん人を(日本刀で)斬り始めたら、十日も斬らないと、頭がもうろうとし、体調がおかしくなること、である。話は具体的に事実的に延々と続く。

話を聞いている内に、ルース・ベネディクトの「菊と刀」(長谷川松治訳、社会思想社)の一節を思い出していた。第十二章「子供は学ぶ」、その部分をぬき出してみる。

「中等学校の上級生は下級生を顎で追い使い、手を替え品を替えいじめる。彼らは下級生にばかばかしい、屈辱的な益当をさせる。こういう目に遭った下級生は、十中八、九まで非常な恨みを抱くようになる」「日本再建に当たって、自国の将来を感る指導者たちはよろしく、後期青春期が過される暗学校や軍隊における虐待と、少年たちに馬鹿げた益当をさせる習慣とに、特別の注意を払うべきである」「それは天皇の神性の否定や、教科書から国家主義的な内容を除去することよりも、日本の再教育という点で、さらにいっそう効果のある変化となるであろう」

群れて整然としている様を喜ぶ左右の日本指導者には、どうやらこの勧告は通じなかったのである。そして私たち大人は集団化が好きだ。自分はけっこう嫌っているのに、子どもが行進をしたり、人文字を書いたりするのを見たいのである。まず集団化、次に集団が外に向って力を発揮するために、徹底した踏みつけ・いじめを奨励する。恨み骨髄の意趣返しを外部へ向わせるのだ。天皇の神性をぬきにしても、そのような教育が可能であることを、日本の戦後教育は立証しつつあると思われる。

〈ふつう〉からの視線

皿海達也の『海のメダカ』(偕成社・一二〇〇円、一九八七・九)は、そういう立証の一つである。メダカは群れたがる。そして川にいる。群れから追い出されて、川にもいられず海に出たメダカは死んでしまう。メダカは海にはすめない。あるいは、威勢よく群れから飛び出て大海を目指したメダカは、そのことに気づいて川にもどろうとする。

いずれにしてもさえない、しょぼくれた話である。そういうメダカを作者はどう見ているのか、というと、なんだか心許なく、戦後集団教育は成功しつつあるという印象だけが残ってしまう。

目線は〈ふつう〉の家庭から放たれている。しゃきしゃきと家庭を支える母親、司法試験への助走の手前で終ったにしても、〈もしものとき〉を終生の糧にして生きる父親、明るい高校生の姉、子どもっぽいかと自分で思っている中学生の弟(主人公)が、二部屋の風呂なしのアパートに住んでいる。

見られているのは、隣に引越して来た父子家庭の、小学校から学校に行かず司法試験を目指している十六歳の少年であり、下の階の中学登校拒否の少女である。少年の方は、双子の知恵遅れの弟がいじめられて学校の二階の窓から飛び出して死んでいる。父親は訴訟をおこすが四面楚歌、母親も家を出た。少年は学校にいたまれず、またいじめを告発し裁く司法官になりたいと思い立つ。

少女は部活の先輩(この語はいつから復活したか)が暴婦人科から出て来たのに遭遇して、カンパというカツアゲもふくんだ報復で学校に行けなくなる。部屋から一歩も出ない。風呂がないのだからたいへんだ。少女は司法少年に唯一心を開いて、そして妊娠する。少年のところには暴力団の親をもつ子どものグループも出入りするようになる。

この子たちは、〈ふつう〉の視線に照し出されているので、同情と非難がごったまぜに出て来て、秤量すればもちろん針は非難の方に傾くのである。ただ私たちの通性として、〈健常〉ゆえに、他人を、まして子どもを思いやることはできない。

「思いやり」とは、皮相を突き破って分け入るとき、自分にはわからない「異質な核」に必ずぶつかることを確信するがゆえに他人に向う心性であり、出会うことの期待が、人間への、発展を秘めた本源的な「なつかしさ」を構成している、という自己確認である。自己確認は、私はなぜあの人のことが気にかかるのだろうという疑問の霊の中に身を隠しているのだが。

少年は公立高校を受けるが、成績抜群にもかかわらず落とされ(本当は受験できない、登校拒否児においそれと志願書をだせないから)、働き始め、どうやら司法試験はあきらめたようだ。少女は中絶し、(偏差値四十そこそこのために)推薦で私立高校へ行くことになる。三家族とも引越し、風の便りで少年も少女も〈ふつう〉になって、忘れ去られることは確実というようである。それがみんなにとっての〈安心〉なのである。

まことに、といって、あとは絶句してしまう。「海のメダカ」という不可能存在を予告する題名であるかぎりは、不可能を可能に転ずる契機が提出されるか、不可能存在は壮絶に散らされるかが関心事である。散華はやはりいつまでも心に残るのである。

微熱っぽさ

短編集の森忠明『その日が来る』(国土社・九八〇円、一九八七・一〇・五)は、なんということなしに読み出して、後半がぜん「捨つべきか手の蝶いまだ死なざれば」(寺山修司)というような微熱っぽさに把われる。(さいしゅ・さとる氏=東京大学助手・生物学専攻)